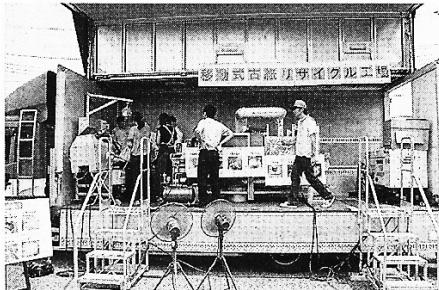


大石産業が千葉と茨城でリサイクル学習会



大石産業の鶴卵用モウルドパック上野氏『パルピー』を紹介する



車両の荷台にリサイクルコーナーを設置し、暑さ対策で扇風機も稼働させた

古紙からつくるパルプモウルドを通じて、子どもたちにリサイクルの大切さを伝えたい——。包装材メーカーの大石産業㈱（大久保則夫社長一本社・福岡県北九州市）は今夏、千葉と茨城両県のパルシステム会員を対象とした『リサイクル学習会』（予約制）を計3回催した。参加した子どもたちは『パルプモウルド移動簡易式製造機』でのトレー作りを体験し、普段気なく見きた紙製の卵パックや青果用トレーが、環境へのやさしさを考えて製造されていることを知った。

千葉県でのリサイクルは、抽選で選ばれた親子30人が参加。大石産業東京支店の上野正司氏は「私たちが紙で卵のパックを作っている『大石同東金センター（東金市）産業』からきました。皆で開催。茨城県では8月さんのがいつも見ているバラシも私たちに目線を合わせ、「きょうは卵パックと一緒に作りました」とあ

これから体験することを楽しんでください」と呼びかけた。パルシステム千葉の平健三常務理事や仲野智美理事らも歓迎の言葉を述べ、稻毛センターの黒崎渡センター長からは「平成30年7月豪雨」によって西日本の製紙生産者がパルプモウルド製のトレーを回収でき、そこで協力があつてこそ卵パックが伝えられた。

パルプモウルド製トレー作り体験

大打撃を受けていることが完成。自らの手でリサイクルの流れが完了したことを実践した親子の「ます」と話した。山口氏が、ファストフード店のドリンク用トレーニング」となっている。

小さな子どもに「それ」として、リサイクル体験を室内に戻り、完成品に

「ちょっと」となって

「私は木材とプラスチックの使用量をいかに減らすかを考えており、基本的に瓶はリユース（洗浄して再使用）で、ペットボトルもバージン原料から作っていいものを使い、もう1つのことだわ

る」と話した。

ついで「プラスチックにいたる」となると、千葉市内から参加した小4男子の母親は「子どもに色鉛筆をする子や、工業品・家電製品などを上野氏から「百円ショップで売っている時、モウルドが使われていることを紹介し、「これかを考へるとモウルドパックを選ぶ」とモウルドパックを考慮した。地球環境の緩衝材などにもバルブで使うことを心構えた。地図環境の問題を理解して、それを幅広く廃止すると発表し話題にまでなりました。中国は昨年末に

古紙と水だけでモウルドをつくる。参加者は5班に分かれ、屋外のリサイクル体験をして屋外のリサイクル体験を行った。

シラウドの子牛のキャラクター「じんせんくん」パックやトレーなどは、パルプモウルドの作り方をモチーフにしてトレー作りに挑戦。大石産業東京支店の松岡拓三氏らが

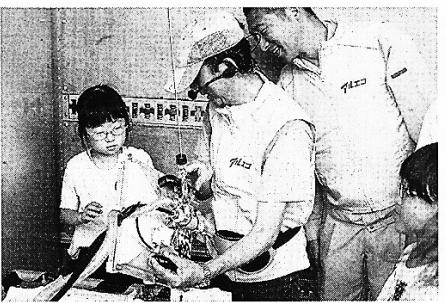
工作の手本となる。上野氏は同社のモウルド製品を見かけることのあると感じます。その常務理事はリサイクル学習会を振り返り、「これ

作られてることを改め、モウルドかな」と、パルシステム千葉の平氏によると、あると思います。その子参加型イベントは大変

うことで品質と価格への理解を得ていきたい」など良いタイミングかと考えた。小さいところから少しだけでも色々な催しを行なってきましたが、夏休みの親子参加型イベントは大変

会場運営に当たった大人でもリサイクルの意識を持つていてほしい」と説明していた。

それが「大石産業のパルプモウルドと水だけでモウルドかな」と、子が10個入るモウルドパックの乾燥には1時間以上をかけて、しつかりした丈夫なパックと作っています。パルシステム千葉の平健三常務理事や仲野智美理事らも歓迎の言葉を述べ、稻毛センターの取り組み、そして組合員の皆さんとのその後はどうなったか？その後はどうなりました。その後はドドロになつた原料を成型に入れ、パルプモウルド製のトレーを回収でき、そこで協力があつてこそ卵パックが伝えられた。



トレーに好きな色を塗る子どもたち、それを優しく見守るお母さんたち